

〔資料〕

昭和女子大学図書館近代文庫所蔵貴重書貴重書簡

高山樗牛・実父齋藤親信書簡の紹介

中村 友・太田 鈴子

はじめに

本稿は、「学苑 日本文学紀要」第九百二十七号（二〇一八・一）に掲載した「昭和女子大学図書館近代文庫所蔵貴重書貴重書簡 坪内逍遙書簡とその翻刻」に続き、高山樗牛（一八七一一一九〇二）とその実父齋藤親信自筆書簡を調査の対象としている。本学が所蔵するのは、齋藤親信宛高山樗牛書状一〇通と葉書二〇通であるが、加えて高山樗牛宛齋藤親信書状を一通所蔵している。今回は、これを含めた全三二通の書簡について、影印翻刻の他、注、補注を付して紹介する。

本題に入る前に、高山樗牛における二父と樗牛自身について確認しておく。高山家の久右衛門には久平（兄）と親信（弟）という二兄弟がおり、弟の親信は齋藤親良の娘芳と結婚、齋藤親信となった。工藤恆治『文豪高山樗牛』（昭和一六・九・二八 文豪高山樗牛刊行會）によると、兄久平と妻岩江には子供がいなかったため、弟親信の第三子を養子とする約束となっていた。明治四（一八七二）年一月一〇日に誕生した林次郎（樗牛）は翌年、姓を高山に改めた。実家及び養家は、ともに林次郎をこの上なく愛し、養父久平の躰はなかなか厳しかった。林次郎は学校が好きであったようだが、負けん気も持ち合わせていたという。

鶴岡市教育委員会編集『高山家寄託 高山樗牛資料目録』（平成一三・八・一 鶴岡市）の「解題」（堀司朗）によると、実父親信は明治八年に酒田県雇となり、後、大宝寺村村長を勤めた。養父久平は明治五年に酒田県出張所雇となり、山形県、福島県に奉職、一三年までは警視庁に勤めたとする。

なお、本書名は、以下『高山樗牛資料目録』と略記する。

樗牛は明治三五（一九〇二）年二月二十四日、わずか三三歳で世を去り、大学在学中から数えるとその活動期間は八、九年程であったことになる。明治二六年、帝国大学文科大学学生であったとき、「読売新聞」の行った「歴史小説歴史脚本懸賞募集」に「瀧口入道」を以て応募し、これが二等賞（一等賞該当作なし）となったことが翌二七年四月一日同紙朝刊第一面に報じられ、その後連載された。『平家物語』に材を得たこの叙情的作品は読者に好評であったが、樗牛は自身の名を公にしていない。その後、評論家としての執筆活動が本格的になるのは明治三〇年の半ば、第二高等学校の教授を辞して、博文館「太陽」に復帰した頃になるうか。日清戦争後の世相をうけて、日本主義を説くが、ニーチェを知って「文明批評家としての文学者」（「太陽」明治三四・一・五）を論じ、国家主義から個人主義への移行を見せた。「美的生活を論ず」（「太陽」明治三四・八・五）では、本能の満足を語るが、これも大きな議論をよんだ。最晩年は日蓮に傾倒し、田中智學にも教えを請うた。明治三五年四月五日刊の「太陽」に「日蓮上人とは如何なる人ぞ」を寄せている。

樗牛没後、刊行された全集は三種（複製版は除外）存在し、すべて博文館から出版された。最初に編まれた『樗牛全集』、次の増補縮刷『樗牛全集』、最後に編まれた改訂註釋『樗牛全集』まで、それぞれ収録数を増補しながら出版を重ねた。

三全集には、書簡集とも呼ぶべきものが編じられているが、左に刊記と収録書簡数を記す。書簡数は、長尾宗典『樗牛全集』の史料的検討（「近

代史料研究」第三号 二〇〇三・一〇・三二）に拠ったものであり、あわせて
 本学所蔵書簡の収録状況をも記した。

(一) 『樗牛全集』第五卷「想華及消息」 書簡一一七通収録

明治三十九年四月一三日、博文館

本学所蔵書簡、収録なし

(二) 増補縮刷『樗牛全集』第六卷「日記及消息」 書簡二七〇通収録

大正五年九月五日、博文館

本学所蔵書簡のうち、書状一通を収録（本状は(三)にも収載）

(三) 改訂註釋『樗牛全集』第七卷「日記及消息」 書簡五九八通収録

昭和八年四月五日、博文館

本学所蔵書簡のうち、書状八通、葉書七通を収録

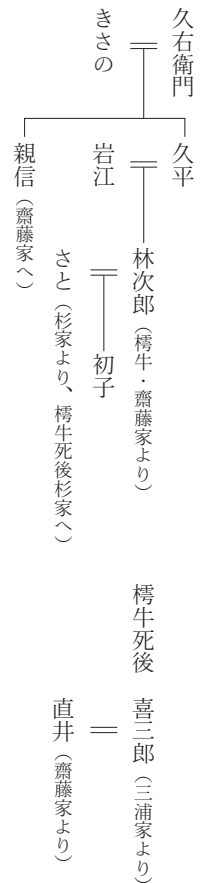
以下、この第七巻を、『全集』と略記する。

所蔵書簡のうち、『全集』に未だ収録されていない書状は二通、葉書は
 一三通ある。本稿の目的の一つはこの未収録書簡の翻刻紹介であるが、『全
 集』既収録書簡の再読を試みるには、よい機会であるかもしれないと考え、
 既収録書簡の影印も掲げている。影印と『全集』、両者を比較すると、『全
 集』は、伏せられた情報が多く、差出人、受取人の住所の他、書状内の後
 付けも、その部分だけ表示されていないことが判明した。親信が樗牛書簡
 に書き込んだと考えられる字句も削除されてきたのであるが、本稿は『全
 集』が伏せたそれらの箇所を、表に出す役割を担ったことになるかと思う。
 久平と親信二人の父が多くの書簡を樗牛から送られ、それをよく保存して
 今に伝えていることは周知の事実であるが、特に実父による書簡の扱いは
 念の入ったものであり、一考に値する。

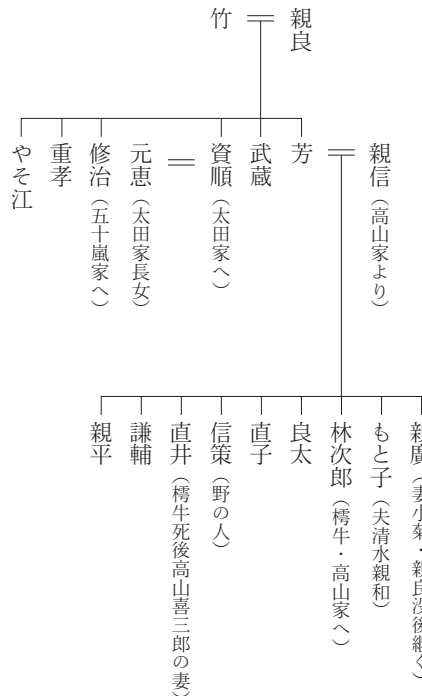
実父齋藤親信宛書簡は、年代は明治二三年から三四年まで。樗牛の激動
 の人生に添った書簡であるものの、実父宛という限定した枠組みの中で認
 められているため、季節の挨拶から健康の言祝ぎ、暮らしたの変動、金銭的
 援助等々を話題としており、当然ながらジャーナリストとして気を吐く時
 の樗牛の姿はない。

次に、書簡に登場する親族を知るため、両家の家系図を下に示す。

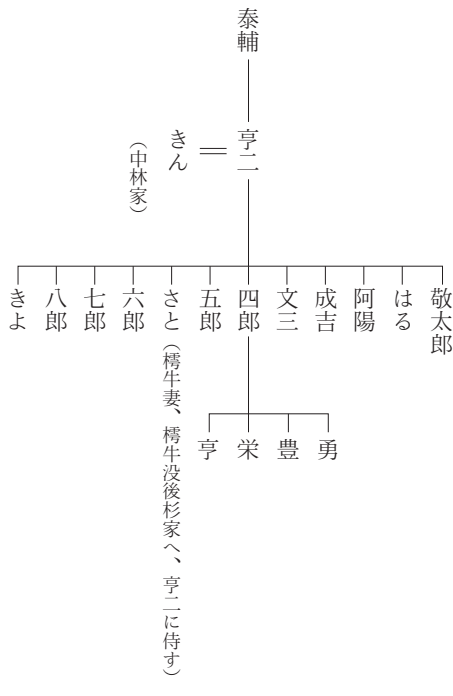
【家系図1 高山家】



【家系図2 齋藤家】



【家系図3 杉家】



【家系図1 高山家】【家系図2 齋藤家】は、『高山樗牛資料目録』収録系図にならい作成した。さらに阿部正路「斎藤野の人（一）」（『国学院雑誌』第八八巻第四号 昭和四二・四・一五）、『明治文学全集』（昭和四五・七・三〇 筑摩書房）、工藤恆治『文豪高山樗牛』（前掲）を参考にし、太田資順、五十嵐修治、天折者名等を補った。【家系図3 杉家】は、杉勇「祖父・杉亨二のことども」（『統計学』三三三 一九七七・九・三〇）にある図にしたがった。

なお、本学が所蔵する樗牛宛齋藤親信書簡一通は、樗牛の徴兵問題について案じた内容であり、発信年月の最も早いものである。本稿はまず、この実父書簡を第一に掲げて、後続の樗牛書簡調査報告へと繋げることにする。

例言

- 一 本稿は、昭和女子大学近代文化研究所の昭和女子大学図書館近代文庫所蔵貴重資料公開プロジェクトの一環として行う報告である。
- 一 書簡は未収録、既収録ともに年代順に配置し、自筆影印を掲げた。
- 一 漢字は原則として自筆の字形通りとし、略体字等も使用した。変体仮名は通行の字体とし、仮名、カタカナ、合字ともに自筆に拠った。
- 一 判読不能の文字は空格（□）とした。
- 一 改行は自筆を基本としたが、紙幅上、完全な再現にはなっていない。いわゆる追而書や行間の書き入れも、自筆にならった。
- 一 書状・葉書に押された角印は一種。陽刻で「齋親」とあり、7_ミ×7_ミである。「□（朱角印）」として示したが、位置どり等は影印で確認いただきたい。
- 一 注、補注における引用の仮名遣いは原文のままとし、漢字は概ね通行の字体に改め、ルビはパラルビとした。
- 一 資料等の出版年月については、初版年月を記した。元号・西暦については、文献の表記にしたがった。
- 一 文中、今日から見ると不適切と思われる字句・表現が含まれる場合があるが、時代資料としての側面を考慮し、原文のまま記した。御了承いただきたい。

昭和女子大学 図書館近代文庫所蔵 高山樗牛他書簡一覧（＊は『全集』未収録）			
実父1	図書館管理番号	差出人	宛先
53-1-1	齋藤親信（実父）	高山林次郎（樗牛）	明治23・1・22
			形態
			封筒なし・巻紙

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
53 ├── 3 │ ├── 3 │ └── 2	53 ├── 4 └── 20	53 ├── 4 └── 19	53 ├── 4 └── 18	53 ├── 1 └── 4	53 ├── 3 └── 3 └── 1	53 ├── 3 └── 1	53 ├── 2 └── 3	53 ├── 2 └── 2	53 ├── 4 └── 17	53 ├── 2 └── 1	53 ├── 4 └── 16	53 ├── 4 └── 15	53 ├── 1 └── 5	53 ├── 4 └── 14	53 ├── 4 └── 13	53 ├── 4 └── 12	53 ├── 4 └── 11	53 ├── 4 └── 10	53 ├── 4 └── 9	53 ├── 1 └── 3	53 ├── 4 └── 8	53 ├── 4 └── 7	53 ├── 4 └── 6	53 ├── 4 └── 5	53 ├── 4 └── 4	53 ├── 4 └── 3	53 ├── 4 └── 2	53 ├── 4 └── 1	53 ├── 1 └── 2	53 ├── 1 └── 1	
高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎	高山林次郎
齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)	齋藤親信(実父)
明治34・11・22	明治33・10・6	明治33・9・30	明治33・8・17	明治33・4・7	明治33・4・7	明治32・6・19	明治32・6・4	明治32・5・23	明治30・7・29	明治30・6・1	明治29・12・22	明治29・12・6	明治29・10・30	明治29・10・7	明治29・4・22	明治28・12・19	明治28・12・8	明治28・10・17	明治28・10・3	明治28・4・6	明治28・3・21	明治28・1・28	明治27・9・21	明治27・5・27	明治27・3・27	明治26・11・3	明治25・10・27	明治24・2・10	明治23・7・11	明治23・1・30	明治23・1・30
封筒・巻紙	葉書	葉書	葉書	巻紙	封筒	封筒・巻紙	封筒・巻紙	封筒・巻紙	封筒・巻紙	葉書	封筒・巻紙	葉書	葉書	封筒・巻紙	葉書	葉書	葉書	葉書	葉書	封筒・巻紙	葉書	葉書	葉書	葉書	葉書	葉書	葉書	葉書	葉書	野紙	封筒
	*		*	*								*	*	*			*		*		*	*	*	*	*	*	*	*			